

政府と東京電力は、福島第一原発による死者はゼロだと主張します。しかし、家畜やペット等の動物は、事故によってどうなったのか、今回の通信は重たい内容です。

被災動物は何を語るか ～原発事故後の牛、犬、猫たち～

動物は避難できなかった 野生化・放れ牛・餓死・安楽死処分

「原発事故発生から2カ月後の5月12日、国は警戒区域内に生存している家畜について、「所有者の同意を得て、当該家畜に苦痛を与えない方法（安楽死）によって処分すること」という指示を出しました。すでに畜舎につながれたまま、家畜の多くが餓死していました。立ち入ることが禁止された警戒区域では、飼い主が家畜と一緒に留まることも、ともに逃げることも、餌やりに通うこともできませんでした。鶏はほとんどの餓死し、豚も大半が餓死、生き延びたものも早期に安楽死処分されました。

不幸といえば、人が立ち入れなくなった牛舎につながれたまま死んでいった牛たちです。食べ物、飲み水がなく飢え苦しんだ牛たちは、最後には牛舎の柱までかじりました。牛の歯で削られて細くなった木の柱が並んでいる牛舎が今も残っています。ここに立つと牛たちの断末魔の声が聞こえてくるようです。

乳牛のほとんどが牛舎内で餓死し、和牛と呼ばれる肉牛が放れ牛となって生き延びた事実を踏まえておかねばなりません。乳牛と和牛では、飼育形態が異なります。乳牛はスタンションという頸部を挟む器具に繋がれて牛舎で過ごす時間が長く、搾乳と乳質管理が必須です。和牛は春から秋にかけて野外で放牧されることが多く、牛舎前のパドック（運動場）でも気ままに過ごしています。

（）酪農家しか実感しえないことがあります。毎朝夕、乳を絞ってやらないと、乳が張って牛が苦しむ。つまり、搾乳が日課の酪農家には、人間がいなくなった状況で乳牛が生きていけるとは考えられなかったのです。

安楽死処分を担ったのは、福島県家畜保健衛生所の職員たちです。もともと動物が好きで獣医師になり、畜産農家を支援したいと思って職に就いた人たちです。ところが、家畜を殺すという真逆さまの任務を遂行しなければならなくなったのですから、彼らの心中は察するにあまりあります。」（眞並恭介『福島はあなた自身』から 福島民報社刊行）

阿武隈山系にある飯館村・浪江町・葛尾村・川内村は、開拓した土地も多く、酪農が産業の柱の1つでした。原発事故で、酪農は壊滅的な被害を受けました。これらの村は、それぞれがアイデンティティがあって、平成の大合併の時も合併をしないで、自主・自立の村づくりを目指して来ました。原発とは全く関係ないのに、飯館村と浪江町の一部は、今も帰還困難区域があります。しかし、これらの村の住民の帰還率は、浜通りの町よりも多いです。“までい（「ゆっくり」「ていねいに）」の精神は、これらの村では今も健在です。



5 牛舎に繋がれたまま死んだ牛たち



6 重機で埋却地に運ばれる牛



7 安楽死処分後、解剖・埋却される



11 三段積みのカゴが並ぶ

福島第一原発事故によって死んだ動物の被害（17年8月末現在 福島県農林水産部畜産課） 大半が津波と放射能・餓死で死亡*牛 3,393頭（内安楽死処分 1,749頭）、豚 16,427頭（内安楽死 3,372頭）、*鶏 81,685羽、*犬（9市町村の登録数）約 5,800匹（内飼主と一緒に避難約 1,470匹）、*猫不明（内飼主と一緒に避難約 200匹）、その他野生の動物・鳥・魚・虫・植物・微生物等の死は不明